

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第77号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)10月16日 火曜日

2018年(平成30年)10月16日 火曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



映画『涌谷7000年の歴史』撮影終了 台風連続来襲のなか奇跡的な快晴での撮影 東北先史時代学の実践プロジェクト⑤

奇跡的な天候回復での撮影

この映画は、企画・プロデュースから、撮影に関するあらゆることを含め、何もかもが初挑戦であり、撮影が無事終了したことは奇跡としか言いようがないとあらためていっています。まず、八月にこの映画の撮影スケジュールを決めてはみたものの、九月末には大型の台風二十四号が来襲するという予想があった。撮影スタッフのスケジュール、出演者とのスケジュール等を調整したものなので、よほどのことがないかぎり変更はむずかしい。スケジュール調整をやり直すならば、それも大変な作業となる。強行突破しかない。と決め、なんとか台風が弱まり、雨天程度ならば仕方ないと、雨天の場合の撮影場所を確保して対応することを決めた。

ところが、幸運にも、台風二十四号は、撮影地に近づくこと、熱帯低気圧に変わり、スピードを上げて、撮影地を通り過ぎていった。なんと二十四号をやり過して、ひと安心していたら、今度は台風二十五号が発生し、進路予想では、まさに撮影スケジュールのど真ん中の来襲予定となり、撮影ができるのかどうか非常に不安だったが、次も奇跡的に、コースを逸れて、なおかつ秋とは思えないような快晴に恵まれた。まさに連続台風来襲を奇跡的に潜り抜けた撮影となった。

撮影初采配、素人出演者ばかりという無謀

撮影についても、何度か経験があれば、おおよその用途はつくが、企画・プロデュースから、撮影に関するあらゆることを含め、何もかもが未経験で、初挑戦であり、何もかもが目見当がつかない。それは撮影も同じであった。加えて、撮影スタッフも短い映像経験はあるが、映画撮影は初めて、出演者は全員が素人であり、そこに素人監督が采配を振るうとなれば、大混乱が幾度も発生する可能性は当然予想される。しかし、何がどう作用したのか、結果的には、撮影はスムーズに、スケジュール通りに進行して終了した。トラブルというトラブルは起きなかった。企画段階から町の全面的な協力が得られたことは大きい。

歴史の重みをより深く実感

撮影に没入していくと、筆者をはじめ関係者が、古代の歴史のなかに没入していくような奇妙な感覚に何度も遭遇した。



涌谷歴史遺産からの出土物



涌谷城跡



砂金採りで砂金が出た!



4000年前の貝塚

それとともに、ずっしりと歴史の重みを実感する場面が何度もあった。

涌谷伊達家の現在の当主の撮影においてもそれを感じた。この方は、関係者の間ではいまでも「殿様」と呼ばれていて、涌谷伊達家の関連行事を進めるには、この方の同意が不可欠なのである。

こうしたことから、涌谷町が城下町であり、その伝統が脈々と流れていることを実感した。

また、麓岳にある篁峯寺貫主さんのお話をお聞きしていると、この寺がいまでも天皇家と深いつながりがあることを実感したし、そのために非常に格式が高いことも実感した。

また、江戸時代に起きた岩手の三閉伊一揆の関係者が、かつての寺の領内に逃げ込んで、いまでもそこで暮らしているという話を聞くと、かつての歴史がまざまざと浮かび上がってくるのだった。

あるいは、横穴古墳の内部に入つての撮影では、奥部の玄室を彫り込んだノミの跡もくっきりしているし、壁の一部には、往時のべんがら塗布の跡も分かります。古代の歴史の手触りが得られた。

あるいは、長根貝塚石碑の近くの畑には今もたくさん貝殻や土器破片が剥き出しになっていて、それが四千年も前のものであると教えられると、一挙に時空

を飛び越える感覚に遭遇して、出演者一同が驚く。そんな場面が何度もあった。

砂金と砂鉄の涌谷

しかし、何と言つても、この撮影の中心は、日本初の砂金の産出である。

このことにより、古代の日本の歴史が大きく変わったことが撮影を通してより強烈に認識できた。

また、単に鉱物資源として金がただけにとどまらず、それがきっかけで仏教が東北に広まり、さらには朝廷と蝦夷の関係も大きく変化したことを実感できた。

しかし、砂金の陰に隠れているが、砂金が出る場所にはほとんどのケースで産出する砂鉄の存在も忘れてはならない。

鉄は、往時、現在のダイヤモンド以上に貴重な鉱物であった。

まずは、鉄を応用した農具が農作地開墾に非常に大きな役割を果たしたし、それによる税収増加も朝廷にもたらした。

さらには、武器に応用することで、より殺傷能力が強化され、戦争による被害者数も拡大したという影響も見逃せない。

涌谷は古代の歴史で重要な役割を担った

このように涌谷という地は、古代の歴史で非常に重要な役割を担ったのである。

いや、古代だけではなく、先史時代から、この地は重要な役割を担っていた。

地理的には、朝廷軍事拠点であった多賀城の北部、朝廷と蝦夷の対峙する場所であった。

地理的な位置以上に、奈良時代には、より朝廷寄りの政治的立ち位置であった。また、それ以前の縄文時代にも、この地は、重要な地域であった。

この地には、現在判明しているだけでも、いまから七千年前から約四七〇〇年間の間、人が暮らしていた。こんなに長期間に亘り、人が住みついていた縄文遺跡を筆者は知らない。

この町の七千年間の連続と続く歴史を通して、この地は重要であり続けたのだ。

いまはさびれた町

これだけの歴史を持ちながら、現在の町は、人口減少と急激な高齢化は言うに及ばず、町のメインストリートは、シャッター通りを通り越して、櫛の歯が抜け落ちたような酷い状況となっている。

過去の歴史の華々しさと好対照の現実が存在する。筆者もこのギャップには何度もめまいを起しそうになったのも事実だ。

撮影の進行とともに、なんとかしなければならぬと何度も思った。

映画だけで町が活性化化するわけではないのは百も承知である。

何らかのきっかけになつて欲しい、この映画で町の魅力を再発見して欲しい、この映画で誇りを取り戻して欲しい、などなど、さまざまな気持ちが湧き上がってきた。

再活性化はどこから？

撮影終了日に、町の関係者と懇親会を開催した。

そこでの話の中心は、やはり映画の話ではなく、町の活性化の話題中心であった。それほど状況は緊迫していると感じた。

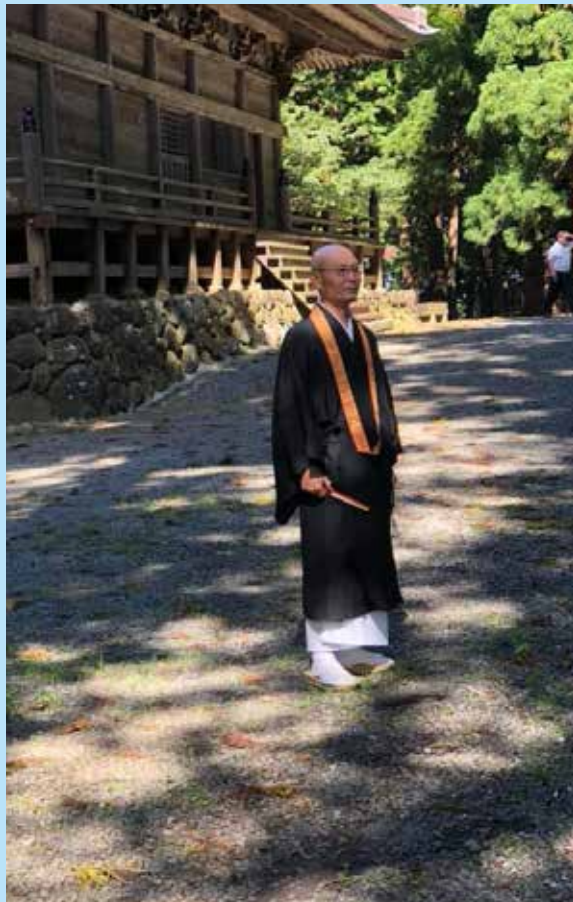
東北の太平洋側の内陸部で、3・11の甚大な被害は受けなかったが、地震の被害を受けた町の様子にも注目することが必要だと痛切に感じた。

比較の対象としてふさわしいのかどうか、またご批判も覚悟の上での比較であるが、ある意味では、沿岸部の被災地の方が活性化している現実がある。

再活性化の糸口を発見するのも困難であり、道のりも厳しそうである。

七千年という歴史を、町の消滅という結論で締めくくってはいけないと思う。

今は、撮影を終了してひと段落という気分よりも、むしろこれからどう関わっていくかというテーマに主題が移ったと感じている。



篁峯寺貫主



かわいい仁王様



何が出現するかツナギの沢貝塚



3/24 の上映予定会場



未発掘の長根竈跡

日本酒豆知識 『ひやおろしって何？』

少しずつ肌寒くなってきました。夏酒の季節も終わり、待望の「ひやおろし」の季節がはじまります。秋は日本酒も美味しい季節です。秋の日本酒「ひやおろし」が出回るのは9、10、11月の、秋まっさかりのシーズン。この期間の間でも「ひやおろし」は熟成度合いを深めます。月を追うごとに味わいが深まるのが「ひやおろし」です。今回は9、10、11月のそれぞれの時期の「ひやおろし」を詳しく説明し、それぞれのおすすめの飲み方、相性の良い料理を紹介します。（出典：KURAND）

その1：夏越し酒（なごしざけ）

9月頃に出回る「ひやおろし」を「夏越し酒（なごしざけ）」と言います。秋らしい涼しい風が吹き始めた季節に出荷されることから「夏越し酒」と命名されました。濃厚な中にも軽快さとまろやかさがあります。まさに、ひやおろしの始めの味わい。

おすすめの飲み方

「夏越し酒」は、冷やして、または常温がおすすめ。変わった飲み方だと、[みぞれ酒](#)も美味しく楽しめます。みぞれ酒とは、日本酒を冷やすことでできるシャーベット状態のお酒。デザート感覚で冷たくて美味しいですよ。

相性が良い料理

冷や、または常温にすることで、和洋中と様々な料理に合います。まだ夏酒らしい爽やかさもありますので、梅水晶、漬物、豆腐といった料理が良いです。素材の旨みが活かされた料理、例えば鍋料理もおすすめです。

その2：秋出し一番酒（あきだしいちばんざけ）

10月頃のひやおろしを「秋出し一番酒（あきだしいちばんざけ）」と言います。味のノリが良く、香りとのバランスも絶妙です。9月からさらに熟成されるので、味の深みを増し、落ち着いた香りと、滑らかな口あたりが特徴です。

おすすめの飲み方

冷やしても、燗でもどちらでもOK。オススメは、人肌に近い温度（約35度～37度）で楽しむ人肌燗です。温めると甘みが増すため、米の香りが引き立ち、香りがふわりと広がります。

相性が良い料理

秋の味覚と好相性です。燗でも冷やしても楽しめるので、きのこ料理、サンマといった秋の様々な料理とよく合います。意外な組み合わせかもしれませんが、フレッシュチーズも好相性ですよ。

その3：晩秋旨酒（ばんしゅううまさけ）

11月頃、満を持して出荷されるのが「晩秋旨酒（ばんしゅううまさけ）」です。これは9月～11月の「ひやおろし」のなかでも、最も円熟な味わいです。豊醇さ、旨味、濃密なとろみの特徴の「ひやおろし」です。

おすすめの飲み方

この「ひやおろし」が出荷される時期は、朝晩冷え込み始めるシーズン。そんな季節だからこそ、燗酒がオススメ。なかでもオススメは「ぬる燗」。温度は約40度、人肌よりちょっと熱いと感じる程度がベスト。円熟された甘みが引き出され、味がひとつにまとまり、香りが立ち、まろやかになります。

相性が良い料理

旨みがたっぷりのった秋の味覚、素材の旨みを味噌や塩をきかせて調理した料理と好相性です。煮込み、ぶり大根、塩から、カラスミ、アンキモなど。煮込んだ鍋料理に、ぬる燗で楽しむのも◎。

第50回

水産業再興のための料理レシピ紹介

《さんまのおろしぽん酢》

今回号も、北海道地震被害がまだ完全に収束していないなか、函館在住の松本さんにご寄稿いただきました。ほんとうにありがとうございました。また、地震で被災されたみなさま、お見舞い申し上げます。（編集長）



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】さんま一匹、醤油 18CC、お酒 18CC、おろし生姜 2g、片栗粉 適量、大根 おろし 100g、大葉一枚、柚子適量

【作り方】① 秋刀魚を三枚におろします ② 醤油、お酒で秋刀魚に下味をつけます ③ 片栗粉をまぶし、油で狐色にあげます。④ さんまを盛り付け、大根おろしを添えぽん酢でいただきます。柚子があれば絞ってかけます。

秋の魚といえば秋刀魚ですが、今年は、不漁だった昨年とは比較にならないくらい豊漁で、価格もお手頃のようです。（編集長）



写真でお伝えする **東北の風景（紅葉の栗駒山）** 写真撮影 尾崎匠



東北には住みたくない？

Jタウン研究所が「どの都道府県に住んでみたいですか？」【2018年版・都道府県別調査】と題したアンケート調査の結果を10月5日に公表した。この調査は今年の1月11日～10月2日までの265日間実施したもので、全国の3714人が回答した。なお、同研究所は2015年にも同様のアンケートを行っているが、その時の調査期間と今回の調査期間は異なっており、回答を寄せた人数も全く異なっているため、今回は前回の調査結果との比較はしないことにする。

票、29%)第5位が同率で神奈川県と福岡県(107票、29%)という結果であった。

岡山県の人気がぶりは、移住者の多さにも現れている。同研究所の記事の中でも紹介されているが、山陽新聞によると、16年度に県外から岡山県に移住した人は前年度比919人増の1865世帯、2773人であり、これは3年連続で増加しているとのことである。

住みたい都道府県の上位は

今回の調査で、住んでみたい都道府県の第1位となつたのは岡山県で、全体の6.6%に当たる245票を獲得してダントツの一位だった。次いで、第2位が沖縄県(88票、5.1%)、第3位が東京都(115票、3.1%)、第4位が北海道(109

岡山県への移住が多い理由については、県内の各市町村窓口が転入者向けに行ったアンケートでは、「災害が少ない」や「気候が温暖」を挙げる回答が多かったという。また、特徴的なのは、県庁所在地である岡山市にだけ移住者が偏るのではなく、他の都市にも分散しているということである。転入者数は岡山市が396人で最も多いが、倉敷市にも307人、井原市にも217人が移住している

ことが明らかになっている。岡山県に次ぐ2位の沖縄県、3位の東京都、4位の北海道は、他の調査でもたいてい上位に顔を出す「常連」の都道府県である。5位には神奈川県と福岡県が同票数で並んでいるが、この両県はいずれも大都市を擁する県の強みが現れているように見える。

東北の4つの県が

同研究所の記事では上位5つと下位5つの都道府県のみが紹介されているが、逆に住んでみたい都道府県のワーストを見てみると、第42位が和歌山県(22票、0.6%)、第43位が同率で青森県、岩手県、群馬県(19票、0.5%)、第46位が同率で秋田県と山形県(18票、0.5%)というものであった。下位5県の中に何と、東北の4県がランクインしているという残念な結果になっているのである。これはいったいどうしたところだろうか。

同記事では、「沖縄県や北海道といった自然環境で強みを持ち県が人気を集める一方、都心からの近さや交通アクセスの便利が『住みたい』と思わせる大きな要因なのかもしれない」

「10位までには大阪府や埼玉県、千葉県もあることから、自身の就業状況を踏まえた現実的な考えから、大都市の近郊を選択した読者が多かったのかもしれない」と分析している。回答した3714人の属性は不明なので、確かにこのように推測するほかはないのだろうし、この3714人が統計的に日本全国の全人口の忠実なサンプルとなっているわけでもないのだから、あまり深刻に真に受ける必要もないのかもしれないが、少なくともある集団が投票した中で、東北六県のうち4つもの県が下位に沈んだというのはやはりそれなりに気になる結果ではある。

福島県の奮闘ぶり

残りの2県、宮城県と福島県であるが、記事中ではどこにランクインしているか不明だったので、得票数のデータを基に、全都道府県のランキングを表にしてみた。その結果、宮城県は京都府と並ぶ13位、福島県は新潟県、徳島県と並んで28位にランクインしていることが分かった。

宮城県が上位にランクインしている理由は、その前後に京都府や兵庫県や愛知県や埼玉県千葉県がランクインしているのと同じ理由であろう。すなわち、いずれも政令指定都市という大都市を擁する府県であるということである。

福島県が28位に入っているのは、東北の他の4県が最下位周辺にある中で健闘と言つてよいのではないかと思う。そして、この結果からは、少なくとも今回投票した3714人の中では、という限定付きではあるが、「住みたい」都道府県を考

えた場合に、福島県に対するネガティブな見方は概ね解消していることが窺える。言わずもなのことだが、東日本大震災に伴う福島第一原発事故の負の影響に福島県はこれまで嫌と言うほど苦しめられてきた。その影響はもちろん今も色濃く残っているが、今回の調査結果からはその負の影響がそれほど大きくなくなってきたように見える。

岡山県の取り組みが

岡山県の取り組みも参考になる。岡山県への移住者の多さは決して、「自然災害が少ない」といった理由から来るだけではない。岡山県はもともと、岡山市、和気町など県内の自治体のサイトでも移住・定住支援のページがかなり充実している。岡山県は東京都内のみならず大阪市内にも「(いじゅう)アドバイザ」という専門の相談員を常駐させ、岡山県内への移住を検討している人に対してフェイストウフェイスで相談に乗っている。移住・定住に関するイベントも定期的に開催している。この

ことに象徴されるように、力の入れ具合が他の都道府県に比べて際立っているように見える。

そして、先ほども少し紹介したが、岡山県への移住は決して都市部だけで進んでいるのではない。これもすごいところである。例えば山陰地方との境にある山あいの村、西粟倉村などは既に人口の約1割が全国各地からやってきた移住者とその家族で、それによって子どもの数が増えてきているという。

同村では、周辺自治体との合併をしない選択をし、面積の約95%を占める森林を「誇れる財産」と位置付けて、森に興味を持つ人の移住を募った。移住者の多くは村内で起業し、地域内にお金を落とす仕組みも始めた。そのような情報を全国に発信することでさらに移住を希望する人に訴求するという循環もできてきた。

岡山県の取り組みが

岡山県の取り組みも参考になる。岡山県への移住者の多さは決して、「自然災害が少ない」といった理由から来るだけではない。岡山県はもともと、岡山市、和気町など県内の自治体のサイトでも移住・定住支援のページがかなり充実している。岡山県は東京都内のみならず大阪市内にも「(いじゅう)アドバイザ」という専門の相談員を常駐させ、岡山県内への移住を検討している人に対してフェイストウフェイスで相談に乗っている。移住・定住に関するイベントも定期的に開催している。この

ことに象徴されるように、力の入れ具合が他の都道府県に比べて際立っているように見える。

そして、先ほども少し紹介したが、岡山県への移住は決して都市部だけで進んでいるのではない。これもすごいところである。例えば山陰地方との境にある山あいの村、西粟倉村などは既に人口の約1割が全国各地からやってきた移住者とその家族で、それによって子どもの数が増えてきているという。

もちろん、東北各県は自然環境の豊かな土地柄ではあるが、それだけにイメージをつくるに頼り過ぎるきらいがある。それはそれとして当然PRしていく必要があるが、それ以外の魅力を探し、見つけ、磨いて、それを果敢に発信していくことである。

移住・定住促進に向けた県の役割の大きさ

加えて、県の役割も重要であると思われる。岡山県

では自らを、県全体で降水量が少なく日照時間が長いことから「晴れの国おかも」と呼び、それに則って上手にイメージづくりをしている。その「晴れの国おかも」の下で、それぞれ市町村が特色ある魅力をPRしているという構図である。移住・定住促進を考える際に、個々の市町村の取り組みだけでなく、都道府県が統一された全体のイメージをつくっていくことが求められる。

もちろん、東北各県は自然環境の豊かな土地柄ではあるが、それだけにイメージをつくるに頼り過ぎるきらいがある。それはそれとして当然PRしていく必要があるが、それ以外の魅力を探し、見つけ、磨いて、それを果敢に発信していくことである。

六県の中で一番心配なのは、実は宮城県である。今回のランキングでも上位にランクインし、実際、震災後東北各県からの移住が増えて仙台圏を中心に人口が増加している。それだけに、東北の他県よりも危機感が薄いのではないかと危惧されるのである。そしてまた、宮城県の弱みは仙台市の知名度頼みの部分が大いといふことである。仙台市を除いて考えた場合に宮城県にどんな魅力があるのか、今のうちにもっと真剣に考えた方がよい。そして、仙台市なしでも宮城県の他にない魅力をPRしていけるよう、今のうちから準備しておくべきである。

当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

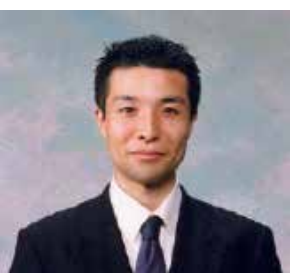
当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagna5/>

Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>



「10位までには大阪府や埼玉県、千葉県もあることから、自身の就業状況を踏まえた現実的な考えから、大都市の近郊を選択した読者が多かったのかもしれない」と分析している。回答した3714人の属性は不明なので、確かにこのように推測するほかはないのだろうし、この3714人が統計的に日本全国の全人口の忠実なサンプルとなっているわけでもないのだから、あまり深刻に真に受ける必要もないのかもしれないが、少なくともある集団が投票した中で、東北六県のうち4つもの県が下位に沈んだというのはやはりそれなりに気になる結果ではある。

同村では、周辺自治体との合併をしない選択をし、面積の約95%を占める森林を「誇れる財産」と位置付けて、森に興味を持つ人の移住を募った。移住者の多くは村内で起業し、地域内にお金を落とす仕組みも始めた。そのような情報を全国に発信することでさらに移住を希望する人に訴求するという循環もできてきた。

当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

当然ながら、宮城県も手をこまねいて見ているわけではない。宮城県でも東京都内にみやぎ移住サポートセンターを設置し、移住を検討している人の相談に乗っている。県のサイトでは、移住・定住推進広報パンフレットや移住定住支援ハンドブックも作成している。ただ、そのキャッチフレーズが、「すべてに『ちょうどいい』と感じられる」ということでの「ちょうどいい、宮城県。」ではインパクトに欠ける感がある。もちろん、情報発信はやりながら、反応を見ながらブラッシュアップしていくべきものであるわけ、今後に期待である。

縄文ブームで東北が 覚醒するか否かという事

仙台の、ある行きつけの書店に行くとき必ずふらりと立ち寄ってしまう「郷土関連」の書棚の隣に、ほぼひと棚全て覆うほどの「縄文」の書物が並べられている。店物の魅力が放つている。主なものを挙げてみると『はじめての土偶』『ときめく縄文図鑑』『ジャズる縄文人』『縄文人に相談』『縄文力で生き残り』雑誌としても、『別冊太陽・縄文』『東京人・東京縄文散歩』『ディスカバー・ジャパン』『縄文人はどう生きたか』『ユリイカ総特集・縄文』



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出沒し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

などなど目白押し。これら新参の華やかな書籍群を、『縄文人になる!』『月と蛇と縄文人』『縄文とケルト』などの名著重鎮が支える。

これはどういう現象かと思ひ、特に気になる新興雑誌らしき『縄文NINE』を手に取ると、なんでも昨年辺りから、東北よりもむしろ東京の方からやけに縄文が盛り上がり始め、今や縄文の当たり年とまで言われる状況なのだという事がわかってきた。というより、そもその火付け役というのがこの雑誌らしく、縄文をネタに様々な視点からの思考実験の記事、例えば縄文的価値観から現代のビジネスの矛盾を捉えたり、現代の遺物が未来で発掘されたりどう解釈されるか考察したりと、遊び心満載の内容内容になっている。

東京国立博物館では先月まで『縄文・一万年の美の鼓動』と称した特別展が盛況のようだったし、巷ではこけしを愛でるように土偶を求める「土偶女子」なる女性が増えているとか、更には『縄文にハマる人々』なる映画まで公開されるなど、『縄文熱』は明らかに只ならぬ様相を呈している。一体この縄文ブーム、今

日本中を巻き込むその要因は何なのだろうか。

そういえば、数年前から何かのきっかけで知って気になっていて、今年を始めに遂にネット通販で購入した、ある一冊の本がある。その名も『縄文物語』。

なんと、一九九〇年に刊行されたものの、二〇〇七年に復刻された、という、やや大きめのコミックである。復刻からも既に一〇年が過ぎており、店頭にはもはやよほどのマニアックな店でもなかなか見かける事のできないレア本なのだ。

考えてみると、貧しく原始的な生活という、日本人の長年の縄文時代イメージを覆した、かの青森県三内丸山遺跡が知られるようになったのは一九九四年以降。この作品はそれ以前のものだが、描かれた縄文の世界は極めて魅力的である。舞台はなんと、現在の岩手県遠野市に当たる地域だ。当然ながら、遠野は縄文時代の中心地とも言うべき北東北にあるのだから、全く不思議ではない設定なのだ、意外にも遠野は縄文のイメージを観光の売りにしていない。あくまでも、『遠野物語』の遠野なのだ。

物語は、当時湖だった遠野盆地の周囲にある集落の娘たちを主人公に、季節ごとの生活や祭式を描写しながら進む。特に、冬の間、

少女たちだけで隣村まで旅をして、大きな宿泊施設で珍しい食や蒸し風呂を楽しむなどの話が面白い。

作者である高室弓生は岩手県生まれの女性。なんと学生時代は岩手県内で遺跡発掘のアルバイトをしていてという変わった経歴があり、その体験を元に、独自の観察・調査から本作の世界を練り上げていったらしい。

既存の概念に捉われないう、斬新な縄文イメージが生まれた秘密は、こうした背景にあったのかと納得なのだ。高室は寡作な漫画家であり、縄文テーマの作品は他に一冊描いているのみである。今回の『縄文ブーム』の中で掘り起こされたあらためて注目されている様子は特に見られないのが何とも残念である。

九〇年代以降、その民族構成の多様さ、稲作や遠洋航海技術などの存在が研究によって明らかになり、縄文のイメージは次々に塗り替えられていく。是非、高室弓生には『新(真?)縄文物語』で更なる驚異の縄文世界を創出し、あらためて縄文の先駆けかつ代表クリエーターとして復活してほしいものである。

ところで、縄文時代にまつわる近年のニュースというところ、二〇〇二年に小学校の歴史の教科書から縄文時代の記述がなくなり、日本の歴史が弥生時代から始まったかのよう書き換えられた

た事が思い出される。「ゆとり教育」に伴う学習指導要領の改訂という事で、最も古い時代の記述は「農耕の始まり・古墳について調べ、大和朝廷による国土の統一の様子が変わる事」と規定されたのである。しかしこれに反発したのが日本考古学協会だった。

一人の小学校教師から、日本史が弥生時代から始まっている事への疑問を提示され、教科書問題小委員会を設置、多くの総会参加者はその実態に驚愕したと言われている。二〇〇七年に中央教育審議会が文科相に答申し、二〇一一年度にはようやく教科書に縄文時代が甦る事となったのだ。

それにしても、現在では(否、当時としても)信じ難い文部省の判断である。特に、縄文時代が見直された事で長年の劣等意識が覆ったといっても過言ではなかった我が東北にとってはまさに暴挙であり、再び東北が否定された、と感じた人も少なくなかったはずだ。

一部では、縄文時代の記述を教科書から抹消したのは「日教組」だといひ、これは日朝鮮人が深く関わっている、日本が朝鮮半島より先に優れた文明を有していた事を示す縄文時代の記述を抹殺する事によって、稲作・農耕を始める事、即ち朝鮮半島からの文化の恩恵によって日本が始まるという図式を確立させたかっ

たのだ。という、いわゆる陰謀論である。しかし調べていくと、全く正反對の「陰謀論」もあり、何やらややこしい事になっている。紙屋高雪という方のブログ(自身は共産主義を標榜)によれば、文化財保存協議会の勅使河原彰氏曰く、九八年改訂の土台である八九年の改訂における指導要領には、「天皇への理解と敬愛の念を深めるようにする事」とあって、日の丸・君が代の強制と合わせて小学校の段階で国民の思想統合を図った、政府の意図が見えてくる、との事である。

前出の学習指導要領の、「大和朝廷による統一の様子がわかる事」の後には、「その際、神話・伝承を調べ、国の形成に関する考え方や関心を持つこと」とあるという。

縄文時代の記述を抹消し、「神話・伝承と絡ませながら、コマ作りを歴史の始まりと印象づける事で、日本人は歴史の始まりからコマを作り祭を営み、そこには『天皇』が常にいた、という歴史観を形成する」とのが、政府の究極の狙いだ、という訳である。

これは、一体何だろう。片や日本を貶めようという連中が縄文を抹殺したと言ひ、片や天皇中心国家・日本を磐石にしたい者らが縄文を抹殺したのだという。もう、どっちでもいいの

だが、当の縄文にとってはいい迷惑ではないだろうか。ここには要するに、縄文の捉え方による民族意識の倒錯が見られるのである。つまり、問題とされる朝鮮側にとっては、縄文は日本の基礎であり、優れた文明であるが、当の日本の、所謂天皇側の人々にとつては、縄文は「黒歴史」であり、消してしまいたい過去のなだ。朝鮮の人々にしてみれば理解に苦しむだろう。

「一体、日本人のアイデンティティは縄文、天孫のどちらにあるのか?」と。 * 縄文が教科書に復活したどころか、ブームの只中にあるという現在の日本において、縄文が朝鮮の人々が考えるべきように、「縄文こそは日本の基礎であり、優れた文明なのだ」と捉えられている事は論を待たないだろう。縄文時代というのは関東や信州にかけて人口も多く文化も成熟したので、東京からブームが起きるのも頷ける。

しかしながら、縄文の素晴らしさは、どこよりも東北の素晴らしさにつながっているものであり、最も縄文を理解し、現在もそのエッセンスを内包して、いつでも体現できるのは東北である。 * そういう思いを胸に秘めている東北人にとつては、縄文という名声を東京に取られていい様に弄ばれている、という歯痒いような感覚がないとも言えないかも知れない。

と、他人事のように書くけれども、東北に住む私たちは思考実験としてでも、まずは日本人としてより東北人として「彼ら」を眺望し、東北は東北でいかに自らの新たな「縄文」に臨むべきかを、考えてみよう。

東北人にとつて、縄文とはそもそも倒錯するまでもない、元々のアイデンティティそのものではないか。つべりした、つまらないビジョンに対する強い反発があるのではないかと。

縄文時代の、想像を超える実態が明らかになる事で、日本人はこれまで与えられてきた既存のアイデンティティを見直し、その多くは天皇を否定しないながらも、これまでとは違う「大和民族」としての概念を再構築しつつあるのではないかと。

ブームという一時的流れが去った時、日本人がどうなっているか。国家の思想統合工作などに惑わされぬより強靱にして柔軟な民族として在り続ける事を、祈るばかりである。



縄文の見直しを先取りした斬新なデザイン『縄文物語』

それが、私たちの縄文ではないのだろうか。



高清水からの夕景



アキアカネ



朝日とススキ



夕焼け

シリーズ 遠野の自然
「遠野の寒露」
遠野 1000 景より

今年の夏は、天候激変と台風と地震とが次々に起き、落ち着く暇もなく、あわただしく過ぎてしまった。気がつく、いつの間にか、すっかり秋のすずしさが定着していて、とても奇妙な感覚がある。このまま静かなまままでいて欲しいものだ。
* さて、遠野もすっかり秋に変わったようだ。雲も、もう夏の雲ではない。朝日も夕日の光も同様だ。あの激しい夏の陽はどこかへ行ってしまった。アキアカネ、秋の夕暮れ、花々もすっかり秋を告げていて、秋の景色に変わった。少しさびしい秋だが、じっくり味わいたい。



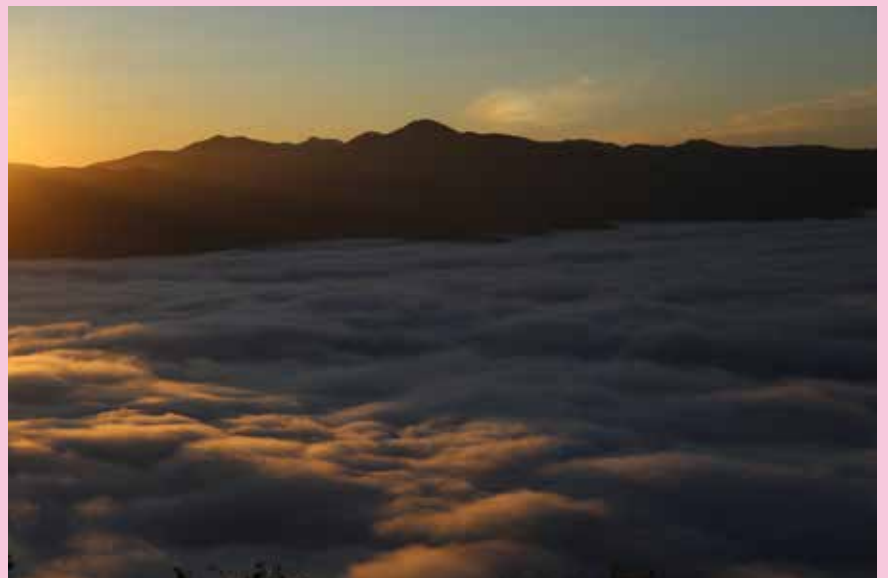
スイレン



ヒガンバナ



リンドウ



雲海に斜陽

歴史の多様性の新発見

歴史はひとつじゃない、多様性が理解できた 連載企画 ⑩ 【東北先史時代学】

歴史はひとつではない、多様性が理解できた

最近、歴史というものはひとつではなくてもよいと思えるようになってきた。昔のある時代に生きていた人々は数多く存在し、さまざまな立場を持ち、一様ではない。思想も考え方も、宗教も、みな異なる。民族さえ異なる。

なのに、そうした人々が同じ歴史観を持ち、同じ歴史認識を共有しているなどというところは幻想にすぎない。

それぞれの立場からの歴史観があり、歴史認識があつて当然ではないか。

これは、現代という時代にも当然あてはまる。現代観、現代についての

認識も共有できないことは、大した困難もなく理解できるだろう。

ならば、昔のことも同じではないか。

現代がそうであつて、過去がそうではないというのは明らかで矛盾である。

しかし、だれもが受ける学校の歴史教育はそうは教えない。だから、歴史はひとつという幻想を抱くのだ。

明らかでない誤りを教えているのであり、時の政権の思惑によって、誤った、しかも恣意的に捻じ曲げられ、統一された歴史認識を、義務教育その他歴史教育のあらゆる場面を通して教えることも可能なのだ。

こうした観点からすれば、自発的で個人的興味から開始される歴史の掘り起し作業は非常に有意義な作業となる。

なぜなら掘り起しの都度、新たな歴史が蘇ってくる可能性が高いし、歴史の定説支持サイドからは新たな歴史認識が出現する可能性は非常に小さいからである。

東北の歴史の多様性

大胆に言わせてもらえらるなら、歴史の多様性とは、こうした歴史の再発掘作業からもたらされると考える。

利害が反している両サイドから、別々の歴史認識が示され、それらに対峙させることで、より立体的で、生々しく、まるで歴史が活きているかのように蘇る可能性が広がると思う。

それがその歴史の醍醐味であると思う。

こうした見方を東北の古代の歴史に当てはめてみると、東北の歴史も例外ではなく、より立体的で、生々しい歴史が立ち上がつてくるとは思えないだろうか。

これまで、東北の歴史というものは、朝廷サイドの歴史観が中心であつたように思える。

そこで、朝廷と対峙した側からの歴史を再発掘することを推奨したい。

負け続けの東北の歴史に関する記述は、歴史の潮流からすれば、負けることが自然な流れであつたように語られる場面が多いように感じる。

しかし、ほんとうにそうであつたのだろうか。

歴史に「もし」と「たら」は存在しないというが、東北に限って、その「もし」と「たら」を復活させてみる試みは許されないだろうか。

縄文文化解釈への疑問

最近の縄文ブームにもかわらず、縄文文化の中心部に切り込んでいくような新解釈が見当たらない。

珍しい文物を外国の文物のように眺める視点だけが目に付く。

火炎土器の形状について驚くとか、土偶は何のためにつくられたのかという点で立ち止まつており、そこから先の切り込みが見られないのは残念である。

かつての日本にあつた異端の流れを部外者として眺めるような姿勢であり、自分たちの祖先であるとの姿勢はとて汲み取れない。

この理由のひとつは、縄文文化を、ヨーロッパ流の考古学から無理やり解釈しようとするからではないかと考えている。

目の前にあるものをそのまま受け容れられずに、わざわざ遠く迂回して、まったくの異文化の網を無理やりくぐらせて理解しようとするように思えてならない。

現代が西欧流の経済に支配されているからといって、縄文文化まで、西欧流の枠組みを通して理解しなければならぬ道理はない。

もっとストレートに、縄文人の文化、縄文人の心に迫っていくことは出来ないのだろうか。

縄文人は分らないと言いつける専門家

あるいは、縄文考古学の専門家のひとり、縄文人の心は現代人には分からないから、いろいろな想像を膨らませてものを言つてはいけないという人がいた。

理屈をこねるようだが、現代人である他人の心の中さえ理解できないのに、歴史上の人物が何を考へていたのか分かるはずはないし、ましてや縄文を考へ、である。そういうことになれば、人は生きていくことさえできない。確実なこと以外は言つてはならないことにな

結果、すべては懐疑のなかにあるという懐疑主義に陥る。

だから、縄文人だけが理解できないのではないのだ。そこまで確実なポイントに固執するならば、縄文考古学はただちに止めをすべきであり、発掘の事実のみに限定すべきである。

誤解を恐れずにいえば、日本考古学が、縄文時代を土器分類のみ縛りつけてきたそもその考へ方がそこにあるのではないか。

そして縄文人の文化に迫

新たな日本縄文考古学樹立を!

これらを併せて考えると、筆者が考へる縄文考古学が導き出される。

ひとつは、西欧流の解釈に頼りすぎないということであり、もうひとつは、縄文人の心の核心に直線的に迫って行くということである。

何も、現代科学も遠ざけよと言つてはいるわけではな

むしろ積極的に取り込んで、キリスト教的な歴史認識に左右されない観点から、先史時代のひとつの文化の可能性、つまり日本の縄文

今回の映画撮影で見つけた日本仏教史の別の断面

ところで、今般の映画撮影で新たな仏教史の断面が見えたような気がしたことがある。

それは天台宗と天皇家の関係である。

涌谷町の篁峯寺の紋章は天台宗のものであるが、十六菊の中央に3つの星をあしらった紋(三諦章)を宗章として

写真で見ると一見して天皇家の紋章に似ている。どちらが先なのだろうかど疑問に思ったが、篁峯寺貫主が明快に答えてくれた。天台宗が先であり、天皇家が後であると。

驚きである。しかも驚きはそれにとどまらない。

京都にある青蓮院という天台宗の寺院があり、開基は伝教大師最澄で、多くの法親王・入道親王(皇族出身で親王の称号を与えられた僧侶)が門主(住職)を



縄文文化を後代の文化であるヨーロッパ流で解釈するのはそろそろ止めよう!



篁峯寺の紋章は天台宗の紋章であるが、天皇家の紋章に似ている